

9 テンソル場とレビチビタ接続の存在性の証明

9.1 前回のおさらい

定義 1. 写像 $\nabla: \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow \mathfrak{X}(M)$ が以下を満たすとき ∇ を接続, 共変微分という.

(D1) 任意の $f, h \in C^\infty(M)$, $V, W, X \in \mathfrak{X}(M)$ に対して,

$$\nabla(fV+hW)X = f\nabla_V X + h\nabla_W X$$

(D2) 任意の $a, b \in \mathbb{R}$, $V, X, Y \in \mathfrak{X}(M)$ に対して,

$$\nabla_V(aX+bY) = a\nabla_V X + b\nabla_V Y$$

(D3) 任意の $f \in C^\infty(M)$, $V, Z \in \mathfrak{X}(M)$ に対して,

$$\nabla_V(fZ) = (Vf)Z + \nabla_V Z$$

接続とは... ベクトル場を微分するルール.

定義 2. 接続 ∇ が以下を満たすとき ∇ をレビチビタ接続 (リーマン接続) という.

(D4) 任意の $V, Z \in \mathfrak{X}(M)$ に対して,

$$\nabla_V Z - \nabla_Z V = [V, Z]$$

(D5) 任意の $X, V, W \in \mathfrak{X}(M)$ に対して,

$$X \langle V, W \rangle = \langle \nabla_X V, W \rangle + \langle V, \nabla_X W \rangle$$

定理 3. リーマン多様体 (M, g) 上には唯一つのレビチビタ接続が存在する.

前回は「Koszul の公式」を用いて一意性を示していた.

命題 4 (Koszul の公式). 接続 ∇ がレビチビタ接続 \iff 任意の $X, V, W \in \mathfrak{X}(M)$ に対して,

$$2 \langle \nabla_V W, X \rangle = V \langle W, X \rangle + W \langle X, V \rangle - X \langle V, W \rangle - \langle V, [W, X] \rangle + \langle W, [X, V] \rangle + \langle X, [V, W] \rangle$$

が成り立つ.

Koszul の公式を用いると, レビチビタ接続の存在性も示すことができる. 今回は, 存在性の証明のために, まずはテンソル場を紹介する.

直積 $W = (w_1, w_2, \dots, w_s) \in K_1 \times K_2 \times \dots \times K_s$
 $W' = (w'_1, w'_2, \dots, w'_s) \in$
 の和の定義: $W + W' = (w_1 + w'_1, \dots, w_s + w'_s)$ とし, $W \cdot W'$

9.2 加群上のテンソル

9.2.1 加群の直積

可換環 R に対して, s 個の R -加群 K_1, \dots, K_s を考える. このとき集合 $K_1 \times \dots \times K_s$ を

$$K_1 \times \dots \times K_s := \{(v_1, \dots, v_s) \mid v_j \in K_j (j=1, \dots, s)\}$$

と定めると R -加群である. $K_1 \times \dots \times K_s$ を K_1, \dots, K_s の直積と呼ぶ.

$K_1 = \dots = K_s (= K)$ のとき, $K_1 \times \dots \times K_s (= K \times \dots \times K) = K^s$ と表す.

9.2.2 加群の線形写像, 多重線形写像

R -加群 K, L に対して, 写像 $f: K \rightarrow L$ が

$$f(v+w) = f(v) + f(w), \quad f(rv) = rf(v) \quad (\forall v, w \in K, r \in R)$$

を満たすとき, R -線形写像と呼ばれる.

R -加群 K_1, \dots, K_s, L に対して, 写像 $A: K_1 \times \dots \times K_s \rightarrow L$ が R -線形多重写像であるとは, 各 $s \in \{1, \dots, s\}$ と, 各 $v_j \in K_j (j=1, \dots, s, j \neq s)$ を固定する毎に定まる写像

$$K_s \ni w \mapsto A(v_1, \dots, v_{s-1}, w, v_{s+1}, \dots, v_s) \in L$$

が R -線形写像であるときをいう.

9.2.3 テンソル

R -加群 K に対して, $K^* := \{f: K \rightarrow R \mid f \text{ は } R\text{-線形}\}$ もまた R -加群となる. K^* を K の双対加群という.

定義 5 (テンソル). R -加群 K と自然数 $s, t \in \mathbb{N}$ に対して, R -多重線形写像 $A: (K^*)^s \times K^t \rightarrow R$ を, K 上の (s, t) 型テンソルと呼ぶ. さらに,

- R -多重線形写像 $A: K^t \rightarrow R$ を $(0, t)$ 型テンソル, もしくは共変テンソルと呼ぶ.
- R -多重線形写像 $A: (K^*)^s \rightarrow R$ を $(s, 0)$ 型テンソル, もしくは半変テンソルと呼ぶ.

$(0, 0)$ 型テンソルは, 単に R の元を表すこととする.

9.2.4 注意

(s, t) 型テンソル全体のなす集合

$$T_t^s(K) := \{A: (K^*)^s \times K^t \rightarrow R \mid A \text{ は } R\text{-線形}\}$$

を考える. $A, B \in T_t^s(K)$ と $r \in R$ に対し

$$(A+B)(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t) := A(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t) + B(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t)$$

$$(rA)(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t) := rA(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t)$$

により, $A+B, rA$ を定めると, $T_t^s(K)$ も R -加群である.

Prop (s, t) 型テンソル全体のなす集合²
 $T_t^s(K) := \{A: (K^*)^s \times K^t \rightarrow R \mid A \text{ は } R\text{-線形}\}$
 $\in R\text{-加群}$

9.3 テンソル場

9.3.1 定義

M を滑らかな多様体とする。

- 可換環 R として M 上の滑らかな関数全体のなす可換環 $C^\infty(M)$,
- R -加群 K として M 上の滑らかなベクトル場全体のなす $C^\infty(M)$ -加群 $\mathfrak{X}(M)$

を採用することで、テンソル場という概念が定義される。 K の双対加群 K^* を $K^* = \mathfrak{X}^*(M)$ で表す。

定義 6 (テンソル場). $C^\infty(M)$ -加群 $\mathfrak{X}(M)$ のテンソルをテンソル場と呼ぶ。

- M 上テンソル場 A が (s, t) 型テンソル場であるとは、 $C^\infty(M)$ -多重線形写像

$$A: \mathfrak{X}^*(M)^s \times \mathfrak{X}(M)^t \rightarrow C^\infty(M)$$

である。

- (s, t) 型テンソル場全体のなす空間を $T_t^s(M)$ と表す。 $C^\infty(M)$ -加群である。
- $(0, 0)$ 型テンソルは係数環 R の元を表すという約束だったので、 $T_0^0(M) = C^\infty(M)$ である。
- $T_0^1(M) \cong \mathfrak{X}(M)$, $T_1^0(M) \cong \Omega^1(M)$ が成り立つ。ここで、 \cong は $C^\infty(M)$ -加群としての同形を表す。とくに、双対加群 $\mathfrak{X}^*(M)$ は $\Omega^1(M)$ に $C^\infty(M)$ -加群として同形である。

$K = \mathfrak{X}(M)$ の双対加群
を、 $K^* = \mathfrak{X}^*(M)$ で表す。

$$\begin{cases} T_0^1 \cong \mathfrak{X}(M) \\ T_1^0 \cong \Omega^1(M) \end{cases}$$

9.3.2 テンソル場の例

$$E: \mathfrak{X}^*(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M) \text{ を}$$

$$(1, 1)\text{-テンソル場 } E(\theta, X) := \theta(X) \quad (\theta \in \mathfrak{X}^*(M), X \in \mathfrak{X}(M))$$

と定め、評価関数と呼ぶ。評価関数 E は $C^\infty(M)$ -線形である。

証明. $\theta, \omega \in \mathfrak{X}^*(M)$, $X, Y \in \mathfrak{X}(M)$, $f \in C^\infty(M)$ とする。

$$\begin{aligned} E(\theta + \omega, X) &= (\theta + \omega)(X) = \theta(X) + \omega(X) = E(\theta, X) + E(\omega, X) \\ E(\theta, X + Y) &= \theta(X + Y) = \theta(X) + \theta(Y) = E(\theta, X) + E(\theta, Y) \\ E(f\theta, X) &= (f\theta)(X) = f\theta(X) = fE(\theta, X) \\ E(\theta, fX) &= \theta(fX) = f\theta(X) = fE(\theta, X) \end{aligned}$$

したがって、評価関数 E は $(1, 1)$ 型テンソル場である。

★ 9.3.3 テンソル場でない例

0 でない滑らかな 1 次微分形式 $\omega \in \Omega^1(M)$ を 1 つとる。 $F: \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ を

$$F(X, Y) := X(\omega Y) \quad (X, Y \in \mathfrak{X}(M))$$

と定めると、 F は $C^\infty(M)$ -線形でない。実際、 $f \in C^\infty(M)$ とするとき

$$F(X, fY) = X(\omega(fY)) = X(f\omega Y) = (Xf)\omega Y + fX(\omega Y)$$

となる。とくに、 F はテンソル場ではない。

9.4 テンソル場が各点でのテンソルを定めること

ここでは「なぜ $C^\infty(M)$ -線形性が必要なのか」という問いへのひとつの答えを与える。本質的な事実は、テンソル場 A に対して、1 次微分形式とベクトル場を与えると定まる関数

$$A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t): M \rightarrow \mathbb{R}$$

は、各 1 次微分形式やベクトル場に依存しているわけではなく、ただ単にその点 $p \in M$ にのみ依存しているということである。

定理 7. $p \in M$, $A \in T_t^s(M)$ とする。 $\theta^1, \dots, \theta^s, \bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s \in \Omega^1(M)$, $X_1, \dots, X_t, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t \in \mathfrak{X}(M)$ は

$$\theta^i|_p = \bar{\theta}^i|_p \quad (\forall i \in \{1, \dots, s\}), \quad X_j|_p = \bar{X}_j|_p \quad (\forall j \in \{1, \dots, t\})$$

を満たすとき、

$$A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t)(p) = A(\bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t)(p)$$

が成り立つ。

定理 7 の証明は後半を参照のこと。

定理 7 より、 (s, t) 型テンソル場は、

- 1 次微分形式 $\theta^1, \dots, \theta^s, \bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s \in \Omega^1(M)$,
- ベクトル場 $X_1, \dots, X_t, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t \in \mathfrak{X}(M)$

に依存するわけではなく、それらの点 $p \in M$ での値

- 余接ベクトル $\alpha^1, \dots, \alpha^s \in T_p^*M$ (ただし $\alpha^i := (\theta^i)_p$, $i = 1, \dots, s$)
- 接ベクトル $v_1, \dots, v_t \in T_pM$ (ただし $v_j := (X_j)_p$, $j = 1, \dots, t$)

のみに依存する。まとめると、次を得る。

系 8. $A \in T_t^s(M)$ を (s, t) 型テンソル場とする。各点 $p \in M$ において、多重線形写像

$$A_p: (T_p^*M)^s \times (T_pM)^t \rightarrow \mathbb{R}$$

を

$$A_p(\alpha^1, \dots, \alpha^s, v_1, \dots, v_t) := A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t)(p) \quad (\alpha^i, \dots, \alpha^s \in T_p^*M, v_1, \dots, v_t \in T_pM)$$

により定める。ただし、 $\theta^i \in \Omega^1(M)$ ($i = 1, \dots, s$), $X_j \in \mathfrak{X}(M)$ ($j = 1, \dots, t$) は

$$(\theta^i)_p = \alpha^i, \quad (X_j)_p = v_j \quad (i = 1, \dots, s, j = 1, \dots, t)$$

を満たすような拡張とする。このとき、 A_p は拡張 θ^i ($i = 1, \dots, s$), X_j ($j = 1, \dots, t$) の取り方によらず well-defined である。

$$\mathcal{X}(M) = \Omega^1(M)$$

9.5 レビチビタ接続の存在性 (定理 3) の証明

補題 9. 任意の 1 次微分形式 $\theta \in \Omega^1(M)$ に対して、ベクトル場 $V \in \mathfrak{X}(M)$ が存在して

$$\theta(X) = \langle V, X \rangle \quad (X \in \mathfrak{X}(M)) \quad (\text{内積})$$

と表される。

証明. 各座標近傍 $(U; x^1, \dots, x^m)$ において示せば良い. 行列 $G = (g_{ij})_{i,j}$ の逆行列 G^{-1} の (i, j) 成分を g^{ij} と表す. U 上で $\theta = \sum_{i=1}^m \theta_i dx^i$ のとき, $V := \sum_{i,j=1}^m g^{ij} \theta_j \partial_i$ とおくと

$$\langle V, \partial_k \rangle = \sum_{i,j=1}^m g^{ij} \theta_j \langle \partial_i, \partial_k \rangle = \sum_{i,j=1}^m \theta_j g^{ij} g_{jk} = \sum_{i=1}^m \theta_i \delta_{ik} = \theta_k = \theta(\partial_k)$$

となる. 任意のベクトル場は $\partial_1, \dots, \partial_m$ の $C^\infty(M)$ -線型結合で表されるので, 任意の $X \in \mathfrak{X}(M)$ に対して $\theta(X) = \langle V, X \rangle$ が成り立つことがわかる. \square

補題 10. ベクトル場 $V, W \in \mathfrak{X}(M)$ に対して, $\theta_{V,W}$ を

$$\theta_{V,W}(X) := \frac{1}{2} (V \langle W, X \rangle + W \langle X, V \rangle - X \langle V, W \rangle - \langle V, [W, X] \rangle + \langle W, [X, V] \rangle + \langle X, [V, W] \rangle)$$

と定めると $\theta_{V,W} \in \Omega^1(M)$

証明. 各 C^∞ 級関数 $f \in C^\infty(M)$ に対して $\theta_{V,W}(fX) = f\theta_{V,W}(X)$ を示せば良い.

$$[W, fX] = (Wf)X + f[W, X], \quad [fX, V] = -(Vf)X + f[X, V]$$

より,

$$\begin{aligned} 2\theta_{V,W}(fX) &= V \langle W, fX \rangle + W \langle fX, V \rangle - fX \langle V, W \rangle - \langle V, [W, fX] \rangle + \langle W, [fX, V] \rangle + \langle fX, [V, W] \rangle \\ &= Vf \langle W, X \rangle + fV \langle W, X \rangle + (Wf) \langle X, V \rangle + fW \langle X, V \rangle - fX \langle V, W \rangle \\ &\quad - \langle V, (Wf)X + f[W, X] \rangle + \langle W, -(Vf)X + f[X, V] \rangle + \langle fX, [V, W] \rangle \\ &= f(V \langle W, X \rangle + W \langle X, V \rangle - X \langle V, W \rangle - \langle V, [W, X] \rangle + \langle W, [X, V] \rangle + \langle X, [V, W] \rangle) \end{aligned}$$

となり示せた.

定理 3 の証明. 与えられたベクトル場 $V, W \in \mathfrak{X}(M)$ に対して, 補題 10 のように $\theta_{V,W} \in \Omega^1(M)$ を定める.

補題 9 より, あるベクトル場 $Z_{V,W} \in \mathfrak{X}(M)$ が存在して, $\langle Z_{V,W}, X \rangle = \theta_{V,W}(X)$ を満たす. すなわち

$$(9.1) \quad \langle Z_{V,W}, X \rangle = \frac{1}{2} (V \langle W, X \rangle + W \langle X, V \rangle - X \langle V, W \rangle - \langle V, [W, X] \rangle + \langle W, [X, V] \rangle + \langle X, [V, W] \rangle)$$

が成り立つ. このとき, $\nabla: \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow \mathfrak{X}(M)$ を $\nabla_T U := Z_{T,U}$ ($T, U \in \mathfrak{X}(M)$) と定めると, (D1), (D2), (D3) を満たすことがわかるので接続である. さらに, $\nabla_V W = Z_{V,W}$ は (9.1) より Koszul 公式を満たすので, (D4), (D5) も成り立つ. したがって, ∇ はレビチビタ接続である. \square

$$(D1) \quad \nabla_{fV_1 + f_2 V_2} W = \dots = f_1 \nabla_{V_1} W + f_2 \nabla_{V_2} W$$

$$(D2) \quad \nabla_{V_1 \cdot W_1 + W_2} = \nabla_{V_1} W_1 + \nabla_{V_1} W_2$$

$$(D3) \quad \nabla_{V \cdot W} =$$

Riesz の表現定理

$$\begin{cases} (V, \langle \cdot, \cdot \rangle) : \text{内積を持つベクトル空間} \\ \alpha: V \rightarrow \mathbb{R} : V \text{ の双対ベクトル} \end{cases}$$

$$\Rightarrow \exists \alpha \in V \text{ s.t. } \alpha(v) = \langle \alpha, v \rangle \quad \forall v \in V$$

(1-2 の表現定理)
Riesz

9.6 テンソル場が各点でのテンソルを定めること (定理 7) の証明

テンソル場が各点でのテンソルを定めること (定理 7) の証明のために, 補題 11, 12 を準備する.

補題 11. C^∞ 級多様体 M の点 $p \in M$ と, その開近傍 U を任意に与えたとする. このとき, p の開近傍 V と, C^∞ 級関数 $f: M \rightarrow \mathbb{R}$ で

$$\bar{V} \subset U, \quad \text{かつ} \quad \begin{cases} f(q) = 1 & (\forall q \in \bar{V}) \\ 0 \leq f(q) < 1 & (\forall q \in U - \bar{V}) \\ f(q) = 0 & (\forall q \in M - U) \end{cases}$$

を満たすものが存在する. ただし, \bar{V} は V の閉包である.

補題 11 の証明は, 『多様体の基礎』 (松本幸夫著, 東京大学出版) の命題 13.11 を参照のこと.

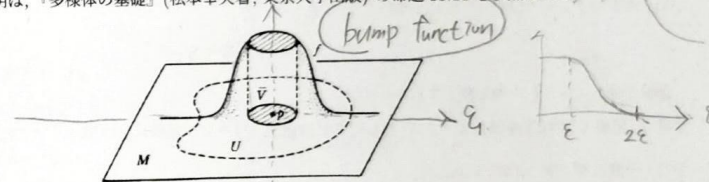


図 1 補題 11 の C^∞ 級関数 $f: M \rightarrow \mathbb{R}$. 『多様体の基礎』 (松本幸夫著, 東京大学出版) の図 13.8

補題 12. $\theta^1, \dots, \theta^s \in \Omega^1(M)$, $X_1, \dots, X_t \in \mathfrak{X}(M)$ が $p \in M$ においてどれか 1 つでも 0 ならば, $A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t)(p) = 0$

が成り立つ.

証明. $s = t = 1$ の場合を示そう. $X_p = 0$ のとき, $A(\theta, X)(p) = 0$ を示す. p の座標近傍 (U, x^1, \dots, x^m) において, C^∞ 級関数 $X^1, \dots, X^m \in C^\infty(U)$ を用いて

$$X_p = 0 \Leftrightarrow X^1(p) = X^2(p) = \dots = X^m(p) = 0 \quad X = \sum_{i=1}^m X^i \partial_i$$

と表される. $f: M \rightarrow \mathbb{R}$ を補題 11 の関数とする. このとき,
 • fX^i ($i=1, \dots, m$) は M 全体で定義された C^∞ 級関数,
 • $f\partial_i$ ($i=1, \dots, m$) は M 全体で定義された C^∞ 級ベクトル場である. したがって

$$f^2 A(\theta, X) = A(\theta, f^2 X) = A\left(\theta, \sum_{i=1}^n fX^i \partial_i\right) = \sum_{i=1}^n fX^i A(\theta, f\partial_i)$$

と変形されるため, p において

$$(9.2) \quad 1 = \left(f(p)^2 A(\theta, X)(p) \right) = \sum_{i=1}^m \left(fX^i(p) A(\theta, f\partial_i)(p) \right) = 0$$

となる. ここで, $f(p) = 1$ であり, また $X_p = 0$ より $X^1(p) = \dots = X^m(p) = 0$ なので, 各 $i=1, \dots, m$ に対して

$$(fX^i)(p) = f(p) X^i(p) = 0$$

が成り立つ. したがって, (9.2) より $A(\theta, X)(p) = 0$ を得る.

$$(9.2) \quad 1 \cdot A(\theta, X)(p) = 0$$

$$= A(\theta, X)(p) = 0$$

<, > : 内積

補題 12 を用いて、テンソル場が各点でのテンソルを定めること (定理 7) を示そう。

定理 7 の証明. ここでは簡単のため, $s=1, t=2$ の場合の証明を紹介する. (一般の s, t に対しても同様に示すことができる.)

$\theta, \bar{\theta} \in \Omega^1(M)$, $X, Y, \bar{X}, \bar{Y} \in \mathfrak{X}(M)$ に対し,

$$\theta|_p = \bar{\theta}|_p, X|_p = \bar{X}|_p, Y|_p = \bar{Y}|_p$$

を満たすとするとき,

$$A(\theta, X, Y)(p) = A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y})(p)$$

となることを示そう.

$A(\theta, X, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y}) = A(\theta - \bar{\theta}, X, Y)$ などの多重線形性を用いる:

$$\begin{aligned} A(\theta, X, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y}) &= A(\theta - \bar{\theta}, X, Y) + A(\bar{\theta}, X, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y}) \\ &= A(\theta - \bar{\theta}, X, Y) + A(\bar{\theta}, X - \bar{X}, Y) + A(\bar{\theta}, \bar{X}, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y}) \\ &= A(\theta - \bar{\theta}, X, Y) + A(\bar{\theta}, X - \bar{X}, Y) + A(\bar{\theta}, \bar{X}, Y - \bar{Y}) \end{aligned}$$

なので, 補題 12 より $A(\theta, X, Y)(p) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y})(p) = 0$ が成り立つことがわかる.

$$A(\theta, X, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y})$$

□ をつけた.

$$A(X, fY, Z) = \langle \nabla_X fY, Z \rangle$$

2

$\omega X : M \rightarrow \mathbb{R}$ を $(\omega X)(p) := \omega_p(X_p)$ とおく,

$\forall f \in C^\infty(M)$ に対し,

$$\begin{aligned} \omega(fX) &= f \cdot \omega(X) \quad \text{であろ.} \\ \odot \quad \omega(fX)(p) &= \omega_p(f(p)X_p) = f(p)\omega_p(X_p) = f(p)\omega_p(X_p) \\ &= (f \cdot \omega(X))(p) \end{aligned}$$

$\omega_p : T_p(M) \rightarrow \mathbb{R}$ は 線形 であろ.

$$\omega_p(rv) = r\omega_p(v)$$

$$\therefore \omega(fX) = f \cdot \omega(X) \quad \text{であろ}$$

(D3)

問1 (M, g) をリーマン多様体, ∇ を接続とする. 写像 $A : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ を

$$A(X, Y, Z) := \langle \nabla_X Y, Z \rangle \quad (X, Y, Z \in \mathfrak{X}(M))$$

により定める. $A : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ はテンソル場かどうかを答えよ. 以下の (1), (2) から正しいものを一つ選べ.

$\mathfrak{X}(M)$ について和とスカラー倍.

(1) テンソル場である

(2) テンソル場でない

$$A(fX, Y, Z) = \langle \nabla_{fX} Y, Z \rangle = \langle f \nabla_X Y, Z \rangle \quad A(X, fY, Z) = \langle \nabla_X fY, Z \rangle$$

問2 M を C^∞ 級多様体, $\theta, \omega \in \Omega^1(M)$ とする. 写像 $\theta \otimes \omega : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ を

$$(\theta \otimes \omega)(X, Y) := \theta(X)\omega(Y) \quad (X, Y \in \mathfrak{X}(M))$$

により定める. $\theta \otimes \omega : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ はテンソル場かどうかを答えよ. 以下の (1), (2) から正しいものを一つ選べ.

(1) テンソル場である

(2) テンソル場でない

$$\omega(X)(p) := \omega_p(X_p) \quad \text{とある, } \omega(X) : M \rightarrow \mathbb{R}$$

問3 \mathbb{H}^3 を 3 次元双曲空間 $\mathbb{H}^3 = (\mathbb{R}^3, g_H)$ とする:

$$\mathbb{R}_+^3 = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3; z > 0\}, \quad g_H = \frac{dx^2 + dy^2 + dz^2}{z^2}$$

$(x, y, z) = (x^1, x^2, x^3)$ とし, クリストッフエル記号 $\{\Gamma_{ij}^k\}_{i,j,k=1,2}$ とするとき, Γ_{11}^2 を求めよ. 以下の (1)-(4) から正しいものを一つ選べ.

$$(1) \frac{1}{z} \quad (2) -\frac{1}{z} \quad (3) -\frac{1}{z^2} \quad (4) 0$$

問4 \mathbb{H}^3 を 3 次元双曲空間 $\mathbb{H}^3 = (\mathbb{R}_+^3, g_H)$ とする:

$$\mathbb{R}_+^3 = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3; z > 0\}, \quad g_H = \frac{dx^2 + dy^2 + dz^2}{z^2}$$

$(x, y, z) = (x^1, x^2, x^3)$ とし, クリストッフエル記号 $\{\Gamma_{ij}^k\}_{i,j,k=1,2}$ とするとき, Γ_{11}^3 を求めよ. 以下の (1)-(4) から正しいものを一つ選べ.

$$(1) \frac{1}{z} \quad (2) -\frac{1}{z} \quad (3) -\frac{1}{z^2} \quad (4) 0$$